

---

# 虹色の飴

薄桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虹色の飴

### 【Nコード】

N1884T

### 【作者名】

薄桜

### 【あらすじ】

子供の頃好きだった、虹色の飴。

いつの間にか、店から無くなって悲しかったけど、復刻版が出るんですって、もう嬉しくて嬉しくて！

これは、その飴が引き起こした、ある不思議なお話です。

## 1 (前書き)

『Smile Japan』参加作品です。

これも、元は携帯でポチポチ打つてたものです。

えーと、色々と・・・信じちゃ駄目ですよ？(笑)

これはフィクションです。

笑って下さいね？

やっと手に入れた！

私は嬉しくて、手にした途端に飛び跳ねた。

子供の頃大好きだった虹色の飴！

記憶通りの姿そのままに、今私の手の中にある。

ちよつと不思議な独特の味で、爽やかな甘さで・・・他に似たものが無いから、味の説明は出来ないんだけど、まあいいよね？

あーっ、もう、本当に嬉しい！

何年振りかなー？ 大好きだったのに、いつの間にかお菓子売り場から消えちゃってて、シヨックだったのよね。

牛乳パックみたいな形をしたカラフルな紙の箱に、個包装の飴が12個入っていた。

あの飴食べたって、よく愚図って世話役に怒られたっけ・・・でもその飴が、期間限定だけど復刻したの！

その話を聞いた時は、もうすっごいテンション上がって、職場の食堂で大騒ぎしちゃって、実はちよつと<sup>ひんしゅく</sup>颯爽かつちゃったんだけど・・・いいの、その話は。

だけど、本当はまだ手に入った訳じゃない。

ここはスーパーマーケットで、私はそこの特設売り場にいる。

私みたいに再販を待ち望んでた者はかなりの数いたみたいで、すごく長い行列待ちで、おまけに1箱限りの数量制限がかかっていた。

子供の頃は普通にあって知らなかったけど、この飴ってこんなに人気があったんだ・・・と、新聞記事での扱いで知り、今日この行列

に並んで思い知らされた。

心の底から湧き出る喜びをそのまま面に出して、その貴重な1個をレジに渡し、お金を払った。

よーし、これでやっと私の物よ！

新聞を見て普通に買えそうにない気がしたから、有給取ってみただ、大正解だったわ。

今すぐにでも食べてしまいたいけど・・・ここは我慢。  
家に帰ってから、ジツクリ堪能するの。

・・・そう、それが失敗だった。

私はそう考えた事を、この後すぐに後悔する事になったのだ。

どうしてすぐに食べてしまわなかったんだろう？

もし1つでも口にしていたら、こんな事にはならなかったかもしれないのに・・・。

浮かれきっていた私は、前から来たスクーターとぶつかりそうになつて・・・何でスクーターが歩道を走つて来るのよ！？

けど、それは運良く避けられて怪我也なかった。

・・・けれど、持っていた飴は私の手を離れ、すぐそばで工事をしていた穴に袋ごと落っこちてしまった。

慌てて駆け寄って覗き込んだけど、

「あぶねーぞねーちゃん。もう下の世界に落ちちまつてるから、諦めな。」

つて、作業をしていたオジサンに止められてしまった。

それでも私は、落ちてしまった場所をしっかりと確認した。

そして駄目もとで、もう一度スパーに引き返した。

やはり、長かった行列は既に無く。

特設売り場には『完売』と、大きく手書きで書かれたダンボール片が立て掛けられていただけだった。

お店の人に聞いてみても、次の入荷の予定は決まって無くて、

「本当によく売れたね、うちも次はいつか知りたいよ。」  
つて、ホクホク顔で返されてしまった。

・・・諦めきれない。

一度は手にした飴を・・・また、いつとも知れない時間を待つなんて、そんな事出来る訳ないじゃないっ!!

私は・・・えーっと、幼等部くらいだったから、たぶん・・・20年くらい待ったのよ?

下に降りる事は禁止されてるけど、バレなきゃいいのよ、バレなきゃ。

だから夜中にコツソリ行動を起こした。

誰もいないのを確認して、スルリと穴に飛び込んだ。

落ちた場所は分かってる。

拾った人間も見た。

生感情報から、彼の現在地も、行動パターンも、経歴も、現住所もちゃんと把握してる。

役所の観察課に勤めてて良かったって、今日ほど思った事はないわ。  
職権乱用?

・・・いいのよ。

私は私の物を取り返すだけですもの。

それ以上どうしようもなくて気は、まったく無いんだから。

狭く暗い穴を抜け、やはり暗く・・・しかし広い空に出た所で、私は薄いピンクの翼を広げた。風を受け止めた翼はさらに大きく広がって、落下の速度を急激に弱めた。

そして、緩く羽ばたき空に浮く。

私はホバーリング状態で腕に嵌めた端末を操作し、飴を拾った人間の情報を呼び出した。

その住所から地図を表示し、実際に目に行っている光景を重ねた。

「よし、あそこね。」

私は一人ほくそ笑み、再び翼を大きく羽ばたかせて、赤いマーカ―の場所を目指した。

絶対に取り返してやるんだから！！

## 1 (後書き)

さて、この女性は何者でしよう？

## 2 (前書き)

始めに書き忘れてましたが、これは短編です。  
文字数の関係で、6つに分割しております。

「いてつ。」

昼に外で豚ロースかつ定食を食べたその帰り、俺の頭のに何かが当たった。

「レジ袋・・・の中に箱？ いや、牛乳パックか？」

しかし、ずれた眼鏡の位置を直して拾ったそれには、液体など入っておらず、振ってみるとカサカサとビニールの擦れる音がした。

どこから落ちてきたんだ？

オフィス街の真ん中で上を振り仰いで見ても、開いた窓など見当たらず、誰かの落し物という線は薄そうだ。

周りを見回してみても、放り投げてぶつけてくれたような、不審な素振りを見せるヤツはいない。

カラスが啜えて飛んでで、落としたか？

しかし、袋にも箱にも啜えたような跡などまったく無くて、謎は深まる一方だ。

袋には店のロゴマークらしきものがプリントされ、中の箱はやたらとカラフルな色使いで、幼稚な印象を受ける。

そして、どちらにも文字らしきものが書かれているが、それはまったく見た事のないもので、さっぱり読めない。

一緒に袋に入っていたレシートも、同様に意味不明だ。

とりあえず、事務所に戻ってから中身を見てみるか。

そう思い、俺はカバンに放り込んで・・・結局そのまま忘れてしまった。

・・・今思えば、この時点できちんと交番に届けておけば、この後の面倒な事態に巻き込まれる事など無かっただろう。

日々、普段通りの生活を送り、人としての一生を送る事が出来たは

ずだ。

人間の好奇心を恨むべきか、浅はかな行動を取った自分を恨むべきか……。

しかし、今更どころ言った所で、もうどうにもならない。

俺の生活は、今日を境に180度変わってしまったのだから。

予想外に長引いた相談の後、それを書類にまとめた。

それから帰宅したのだが、家に帰りついた頃には日付が変わりそうになっていた。

ま、長引いても、その分金になるから苦にはならない。

しかし、夕飯はどうしたものか……空腹のピークを過ぎ、今更の感はあるが、まったく減ってない訳でもない。

そんな事を考えながら、部屋の鍵を外してドアを開けると……ピンの羽根を背負った、茶色い頭の若い女が家の中にいた。

「飴を返して下さい。」

そしてその女は唐突に、そう訳の分からない事を言う。

その物言いは丁寧だが、声には迫力があり、どこか否定出来ない威圧を感じ……そこが気に入らないなど、まず感じた。

しかし、何でこいつ羽根なんか背負ってんだ？

そもそも何でうちに居るんだ？

……こいつは頭のイカレた痛いヤツか？

「お前誰だ？」

「天の使いです。」

即答された言葉に、俺はうんざりした。

……やっぱり頭の可哀想なやつか。

綺麗な顔してるのに、もったいない。

「……で、どうやって入った？」

「どうやっても何も、私達に人の物理法則なんか通用しませんよ。それより飴を返して下さいってば。」

さすが頭の可愛そうな女だ。今、さらっと妙な事を言いやがった。それより、複数形だった事が気になる。

・・・他にお仲間がいるのか？

「飴って何の事だ？」

「飴の入った牛乳パックみたいな箱です！ 空から落ちてきたですよっ？」

「・・・ああ、あれか。」

必死な様子の女を横目に、カバンに放り込んですっかり忘れていた箱を手探りで出した。

「それです、それ！！」

女は箱を目にした途端に喜んだので、俺は目の前で、その箱を無造作に破って開けた。

「あーっ！？何するんですか??？ 復刻版ですよ、それ！ すっごい行列に並んで買ったのに・・・。」

「知るか。この箱を知ってるって事は、お前がぶつけたんだろう？ しかも不法侵入までして、高圧的な態度を取ってるのが悪いんだ。」

そのまま中身を1つ取り、何の躊躇ちゆうしゆも無く袋を破った。

「ほお・・・確かに飴だ。しかし、すごい色だな。」

袋から現れた球体は、輝石のように虹色にじいろに煌きらいていた。

すごい進歩だな。今はこんな物が作れるのか？ お菓子メーカーの技術はすごいな。

もちろん俺は、その飴を口に放り込む。

その瞬間、女は悲鳴を上げ、口の中には不思議な味が広がった。

嫌がらせのためだけに、別に食べたい訳でもない飴を舐めたんだが・・・驚いた。

俺はこんな味は知らない。

飴だから甘いのは甘いんだが、それだけじゃない。

本当に、お菓子メーカーの技術はすごいものだと思ひ感心した。

「な、何て事するんですか!? 12個しか無いんですよ? 12個!! 私は200年待ったのに! あなた本当に何様のつもりなんでしょうか!?!」

何様?

何様って、俺は弁護士だ。

だがその言葉を音にする事は出来なかった。

背中に違和感を感じると、すぐに体中に鋭い痛みを感じた。

「がはあっ・・・何だこれ? 何だよ、この痛みは・・・?」

「知りませんよ。天界の食べ物人間が食べたらどうなるかなんて

」

イカれた女に言い捨てられた言葉は、ただ耳に届いただけで理解には至らなかった。激痛のため、何も考える事が出来ない。

俺は死ぬのか!?

しかし、その恐怖よりも、さらに痛みの方が激しい。

俺は、そのあまりにも激しい痛みに耐えきれず・・・あっさりと意識を手放した。

「・・・もう、副作用なんて知らないわよ。」

側で聞こえた抑揚の無い声に目を開けると、ピンクの羽根が見えた。「・・・って、あ、起きた。何であなたは私の飴食べたのよ? そうじゃなきゃ、ちゃんとコッソリ戻れたのに・・・。」

ものすごく不満そうな声が、そう言っただけ盛大な溜息をついた。

もう俺の背中に痛みは無く、あいかわらず俺の部屋について・・・死

んだ訳では無さそうであ堵した。  
どうやって移動させたものか横向でベッドに横たわっており、背中  
には激しく違和感を感じる。

・・・良く見れば裸で・・・驚いて起き上がるうとして、背中の重  
みと、新しい感覚に更に驚いた。

「背中が重いんだが・・・。」

「綺麗な羽根よね、私初めて見たわ。虹色に輝いてて・・・まるで  
絵で見たアイリスみたい。」

「・・・羽根？」

無理に体を起こすと、確かに視界の端に羽根が見えた。

羽毛の一枚一枚が蛍光灯の光を受けて、動くたびにその色の加減を  
変えた。

「確かに綺麗だな。」

そう応えたものの・・・おい待て、羽根だと？

女の羽はピンク色で、この羽根とは色が違う。

手で探ると、その羽根は自分の背中に繋がっていた。

・・・待て、どういう事だこれは？

裸にされたのは上だけで、下はそのまま、そこは安心した。

だが、もう既にそんな次元の問題ではない。

違和感の元である感覚を意識すると、羽根に至った。

今まで無かった感覚で新しい神経を意識し、新しい筋肉を動かして  
みると、背中の羽根が意識した通りに動いた。

自分の意志で動くって事は、俺の背中から生えてて、これは作り物  
にしては、あまりにも精巧な出来で・・・

「何だこれ！？ 何で俺こんなの生えてんだよ????」

「あなた、天使に昇格しちゃったみたいよ。」

床に三角座りで溜息をつく女は、さらに意味不明な事を言った。

「はっ？」

・・・何言っただこいつ？

俺は背中羽根について聞きたいわけで、天使がどうのって・・・  
「って、天使!？」

「そう、あなた天使になっちゃったの。」  
女は自分の口の中に、この元凶である飴を放り込んで、幸せそうな顔をした。

玄関のオレンジの光ではなく、蛍光灯の明るい光の下でよくよく見れば、確かに日本人離れた顔で、瞳の茶色も明るめだ。という事は、髪も染めたものではなく天然なのかもしれない。

しかしそうになると、ここまでしつかり日本語で意思の相通が出来ている事の方に疑問を感じる。

「天使はどの言葉でも理解出来るのか？」

「まさか。昔激怒した神様が、勢いで色んな言葉作っちゃったから、その昔の天使達も迷惑しちゃってね、急いで万能の翻訳機を開発したんだって。で、それは今この端末に組み込まれてるの。」

女は、まるで笑い話をするように言って、左手のブレスレットを少し触って、空中に何かの画面を表示させた。

「・・・ああ、そう。」

バベルの塔の崩壊は、天使の中ではそんな扱いなのか？

・・・って、俺天使がどうのって話を信じてきてるのか？

自分の背中から生えた、自分で動かせる羽根には疑いようがなくて、女が操作する端末と呼ぶブレスレットは、まるでSF映画のような代物で、現在この世界には存在しない。

俺は、天使を信じる信じない・・・というより、この状況を認められるか否かで、一人頭を悩ませていると、女は再び飴を口に含み、やっぱり幸せそうな表情をしゃがった。  
くそ、何だこいつ。

俺を信じられないような目に合わせておいて、一人で浮かれやがって。

「やっぱり美味しい。昔と原材料を少し変更してるだなんて、全然

分からないな。」

俺は、お前の言っている意味が分からない。

「・・・一体何の話だ？」

「あなたが勝手に私の飴を食べちゃうのが悪いんだからね。」

そう不満の一瞥をくれた後、女の語った内容に俺は言葉を失った。

俺が食べた飴は、その昔ある問題を起こして販売中止になった物の復刻版らしい。

その当時も、この目の前の女のようにドジなヤツがいたらしく、うつかり天界から地上にその飴を落とし、俺みたいな怖いもの知らずの馬鹿がそれを口にした。

そいつは背中から羽根を生やし、大問題になったらしい。

散々協議した結果、地上に置いて置くわけにもいかず・・・結局天界に召し上げられたそうだ。

問題を起こした飴は、当然の如く販売停止の処分を受けた。

しかし、その飴は天使には一切何の影響も無く、子供達にとっても人気があった品なので、復活を望む声は多かった。

それを受けて材料を変更し、味が変わらぬように改良に改良を重ね、ようやくこの度の復刻となったそうだが・・・改良の甲斐はなかったらしい。

今回も見事に羽根が生えた。

「バレるのは嫌だったけど、こうなっちゃったら上に報告するより他に無いし・・・でもまず先に製造メーカーに問い合わせてみたら・・・今までの謎が解けたわ。」

女は剥<sup>むく</sup>れているが、そうしたいのは俺の方だ。

「・・・報告して、どうなったんだ？」

「前回のマニュアルに従い、あなたも天界へ受け入れるんですって。」

「なるほど。」

前例通り・・・よく聞く話だな。

「まったく・・・そんな綺麗な羽根、私より格が上よ?」

「知るか。じゃあ、今の俺の生活はどうなる？ 仕事は？ 家族は？」

「何言ってるの、改ざんに決まってるじゃない。」  
「そんな事を、天使がサラッと言うな。」

「つまり・・・俺はこの世界から消されるって事か？」  
「そうよ。」

それは、見下されているという事になるんだろうな。  
天界から見れば、地上は野蛮？

神話なんかでは、確かにそう扱われているが、実際にもそうなのか？

「ま、結婚もしてないし、特定の彼女も居ないし。あなた身軽だからいいじゃない。」

しかしこの女・・・否定とは言わないまでも、もう少し何か他に  
言いようは無いのか？

あまりにも身も蓋もない物言いは、さすがに神経を逆撫でされる。

「・・・そういう問題じゃないだろう？」

「あなたが寝てるうちに色々調べてみたんだけど、今回は羽根が生えただけじゃなくて、完全に天使の体になってしまっみたいよ。体の組成が天使のそれで・・・たぶん寿命もかなり延びたんじゃない？」

・・・は？

話を聞いてるうちに、俺はかなり冷静になり、色々と考えられるようになってきていたのだが・・・それには驚かされた。

「マジか!？」

種を飛び越えるって、どれだけ危険な飴なんだよ!？」

「マジです。しばらくは施設で天界についての勉強する事になるらしいわよ。その後は、普通に生活する事になるんじゃないかな？」

普通って、もう俺にはすべてが普通じゃない。

「その羽根なら、ひよっとして結構出世が出来るかもよ?？」

「出世?・・・余所者が出世って無理だろ?？」

「分からないわよ? 前例が無いからどんな結果になるか想像もつ

かないし。でも羽根だけなら凄いなだから。」  
女はそう言つて、可笑しそうに笑いやがった。

そうして、まるで納得がいかないながらも、色々と天界の話の聞かされた。

そしてそのうちに、お偉いさんとやらが姿を見せ、俺はごく事務的な扱いを受けて、天界へと連れて行かれた。

俺は暫くの間、施設・・・と言うか、役所の一室でざっくりとしたこの世界の説明を受けた。

やっぱりこのヤツらはどこか事務的で『ただ仕事だからやっている』そんな印象だ。

上辺だけの笑顔の裏に、面倒な事には関わりたくないという本音が見え見えで・・・自分の事なんだが、正直どうでもよくなってきた。

そしてそれが終わると、俺は再びあの女・・・俺が人間から逸脱してしまつた原因の天使と顔を会わせる事になった。

「まあ、いくら説明した所で、実践には適いません。一見は百聞にしかずですよ。これから、このサファイーナに色々教わつて下さい。今後彼女があなたの世話係になります。では、私はこれで失礼します。」

今日の担当だつた講師は、丁寧に頭を下げた後、

「責任取るのは当然ですよね？」

そう、に囁いて、部屋から出て行った。

そして仏頂面の女は・・・あいつそんな名前だつたのか。

「もう、何度も何度も・・・言われなくても分かってますよ、そん

な事。」

と、呟いてさらに険しい顔をした。

そういえば、こいつはどうなったんだろう・・・って、現状を見れば想像がつく・・・か。

どうしてああいう無責任で使えないヤツらは、人の失敗を論あげつらうのが好きなんだろう？

これだけ希薄なお役所だ、叱責はさぞ相当なものだったんだろう。

こいつが今後、俺の世話係になるという事は、今までの観察課とやらの仕事も失ったと見て間違いないだろう。

だが・・・まあ、それは俺の知った事じゃない。

俺は、こいつが引き起こした事の被害者で、こいつが責任を取らされたのは、当然の報いである・・・と、そういう認識は持っている。しかし、こいつがこの世界で一番マシだとも思っている。

「責任・・・か。」

何も知らない異種族の新参者。

やつらにしてみれば、さぞかし迷惑な存在だろう。

その俺の保護責任者は、たらい回しのあげく、ここ、文句の言いよりの無い元凶に落ち着いた・・・と、いう訳だな。

でもそれは、俺にとっても都合な事だ。

既に俺は、いちいち腹を立てたり、憤ったりする気は無い。

不満を言った所で元の体に戻れる訳も無く、俺の存在していた世界には、もう既に居場所が無い。

無理に居続けた所で、一人時間の流れの違う自分は、10年も経たないうちに生きにく難くなると分かりきっている。

天使は人間と同じくらいのスピードで成長し、成人年齢も大差無いらしい。

しかしそこから先は、まるで違う。

下級の天使でも人の10倍ほどの寿命を持ち、老化する事は無いそうだ。

上級になれば、寿命という概念すら消えるらしい。

つまり俺も、27歳現在のこの姿から、外見年齢が変化する事は無いそうだ。

・・・これが俺じゃなくて、始皇帝なら大喜びだっただろうに。

講師から色々な事実を知らされる度、大き過ぎる変化について行けなくなった俺は、つい『観察』という目線で物事を見るようになってしまった。

その観察の結果分かった事は、この世界には早く慣れる事が出来そうだという事だ。

ただしそれは、とても残念だとしか言いようが無い。

「天界つて、人の世界より酷いとこなんじゃないか？」

昔から人間は天国に希望を抱いてきた。

それは己を律するため、そして、信者を増やすために。

清らかな美しい世界、華やかで幸福な世界、正しく公平な世界。

それが人々の思い浮かべる天国像だ。

なのに・・・今俺が見たものは、人の世界と何が違う？

人間は神の姿に似せて造られたというが、こんな所まで似てたのかと、正直かなりガツカリした。

「私は知識としての地上しか知りませんが・・・、そんなにここは酷いですか？」

「酷い・・・皆やる気が無さ過ぎる。」

口を開いた女のよそよそしい態度に、俺は少し苛つとした。

あの日とも、さっきとも違う・・・他のヤツらと変わらない口振り。・・・俺はもつとマシな会話がしたい。

「このトップの神つてのは独裁者か？ それともお飾りか？ そういうところは下が腐るつてのが定石だな。」

それはただ、相手の出方を見たいがための極論に過ぎない。確かにそういう例は多いが、マシな部下がいれば結果は違う。

「いえ、神様は絶対的な存在で、常に正しく。絶対に間違いを犯しません。でも、孤高で干渉もありません・・・だから下が緩いんです。たぶん本当は部下なんか居なくても、神様だけできつと平気なんです。皆そう思っているから・・・。」

女は少し哀しそうな様子で言葉を切り・・・それ以上続ける気は無いらしい。

「最初は、ただの事なかれ主義かと思つてたんだが、・・・諦めからくる無関心か。大丈夫かここ？」

「さあ？ ずつとこうですから。」

そう薄く笑った女に、やっぱり違和感を覚えた。

やっぱり違う。こいつはこんなじゃない。

「・・・なあ、それ止める。俺そういうのもう嫌。話してて楽しくない。前みたいにもつと感情的になつてくれ。」

「感情的つて・・・。」

女は心外だと言わんばかりの表情を見せ、俺は少し嬉しくなった。

「ずーっと取つて付けたような笑顔ばっかで飽き飽きしてたんだ、お前以外のヤツはな。だからいい加減、血の通った会話がしたいんだ。」

そう言つて腕を上には伸ばした。

未だ慣れない羽根はバランスが悪く、実はかなり肩が凝る。

「それに、変に責任を感じる必要も無い。勝手に食つたのは俺だ。」  
女は一瞬何かを考え、不意に笑い、それから不満を吐き出した。

「・・・何言ってるの、当たり前じゃない。あなたが拾い食いしなきゃこんな事にはならなかったのよ?」

やっと人らしい・・・もう既に人ではなくなった身だが・・・会話が出来るた。

「ん、その調子。けど、あれは拾い食いとは言わないだろう? お前が勝手に人の家上がり込んで偉そうにしてるから、嫌がらせをただけだ。」

「・・・最初から思ってたんだけど、あなた、本当にいい性格してるわよね?」

軽く睨んでくる女に、俺は我知らず笑顔を返した。

俺は今まで、口喧嘩がこんなに楽しいものとは思わなかった。

「いい性格で結構。どうせ俺はこれからモルモットなんだろう? その代わりに公費で左団扇な生活をさせてくれるんだろう?」

「・・・そこまで安楽かどうかは知らないけど、確かに住む場所も生活費も、お菓子メーカーの感謝料と公費で賄われるわね。」

予想通りだ。

モルモットは否定されず、見事にスルーされた。

「ほら当分は、楽をしながらこの世界について学ばいいんだろう?」

「まあ、そうなんじゃない?」

そう適当な返事をした女に、俺は右手を差し出した。

「じゃあ、仲良くしよう、世話係さん。」

「はあ、仲良くねえ・・・っていうか、世話係さんって呼ぶのは止めてよ。私はまだ若いのよ?」

今の俺には解らない不満を漏らし、怪訝な様子ながらも出された右手を、強引に捕まえて握手をした。

「じゃあ俺も『あなた』じゃない。和真かずまって事で・・・よろしくサ

「フィーナ。」

「・・・あ、うん・・・よろしく、和真。」

そうか、こいつは若いのか。確かに行動はアレだが・・・  
外見が変わらなくても、年齢は気にするのか。

見た目で歳が判らないというのは、それはそれで不便なものなんだな。

・・・と、妙な所で関心した。

こうして、俺の天使としての生活がスタートした。

予想以上の家を用意され、たいていの望むものは手に入った。SFチックなブレスレット型の端末も支給され、様々なデータを見る事が出来た。

さすがに、機密書類に関するものはロックがかかっていて無理だったが、「この世界を理解するために」と申請すれば、「自己責任でお願いします」と、結構なレベルのデータにまで目を通す事が出来た。

・・・事なかれ主義もここまでくれば、清々しい。  
とりあえず当分は、学ぶ事が多くて退屈する事は無さそうだ。

そしてそのうち・・・この腹立たしい世界をひっくり返してやる。

・・・こんなヌルイ世界に引き摺り込まれて、誰が納得できるって言うんだ？

サフィーナは愚かだと思うが、嫌いではない。  
むしろ好きな部類に入る。

飴を啜えた時に見せた、幸せそうな顔は実はかなり好きだ。

・・・さすがにあの時あの状況では、苛つかされたただけだが。  
今のあいつは、些細な事で怒って面倒な事もあるが、その分よく笑う。

きちんと感情があつて、喧嘩が出来て、普通に接してくれる。  
俺にとって唯一の・・・貴重な存在だ。

よって、恨みを返すには適当な場所ではない。

だから、俺はこの世界に対して恨みを晴らす事にした。

環境で人は変わる。

だから環境を変えて、ヤツらを変えてやる。

口先三寸で言いくるめるのは得意だ。法を武器に戦う術も知っている。

弁護士を舐めるな。

そして、俺の羽根は確かに大きな力を発揮してくれそうだ。

この虹色の羽根は相当上の階級に位置するとされ、現在そして歴代の所持者は皆、支配階層にある。

天界での虹色の羽根に対する信仰・・・というか、信頼は大きいらしい。

しかも都合のいい事に、現在この色を持つ者は極めて少ない。

実現するまでに、どのくらいの時間がかかるのか見当もつかないが、幸いな事に無駄に寿命は長い。

じっくりと・・・そして確実に。

この腐った世界を壊して、俺の理想の世界を創ってやる。

それが俺の支えだ。

天使に変わってしまった、その理由であると信じる。

意味があると思わなければ、やってられない。

・・・そう、絶望させられた、俺の復讐だ。

## 6 (後書き)

読んで下さった方・・・本当に感謝です。

・・・でも、本当に信じちゃ駄目ですよ？（誰が信じるよ？）  
この話での天界像は、笑って下さいね。

天使の公用語はヘブライ語って事なので、翻訳機。

女の天使は疑問視されるのですが、男ばっかでも・・・ねえ？  
ましてや、両性具有は・・・  
ほらほら、ガブリエルの女性説とか、ソフィアとかあるし。

上位の天使は、六枚羽根だろうって？  
天使の羽根は、ギリシャの神に倣ったんだそうですよ？

人が天使にっつてのは、アダムの子孫であるエノクが、  
メタトロンって天使になったとの事です。

「エル」って名前だと、天使っぽいけど、  
『エル』は『神の』という意味らしいので、  
下っ端につけるには偉そうだなと思いつめて、  
適当にサフィーナと命名。

これで辻褄は合わせた・・・かな？（笑）  
参考資料はPHP文庫の『「天使」と「悪魔」がよくわかる本』で  
す。

これも興味ある分野です。

色んな神話を読み漁って、比較して、共通点を探す。

それが楽しかった時期があります。

学生時代、図書室の神話の本はすべて手を出しました。

宗教は研究対象？・・・無神論者の日本人ですね、本当に（^^）；

ちなみに、人の都合が加えられたものより、もっと昔の、

自然を恐れて崇めていた頃の方が好きです。

・・・無茶苦茶で楽しい。

ちなみにアイリスは、ギリシャ神話の「虹の神」です。

天使の羽根は、数は増えれど色は白しか見当たらなかったの・・・

イメージ先行で考えて、そんな天使はいなかった・・・と。

そこで借用。

あ、神は「柱」で数えますが、天使って何ていう単位で数えたらいいんでしょうね？

そこ見つけられなかったの、どなたか知ってる方。

教えて頂けると、ありがたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1884t/>

---

虹色の飴

2011年5月12日12時01分発行